横須賀水交会

「会長挨拶」

横須賀水交会会長　長崎　嘉徳

新春を迎え横須賀水交会の皆様には益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。

海上自衛隊はアデン湾をはじめとする国内外の各地において黙々と任務に邁進しており、隊員はじめ留守を預かっておられる家族の皆様には深甚なる敬意を表します。我々日本国民が夜枕を高くして安眠できるのも昼夜分かたず国防に当たっている自衛隊のお陰だと感謝の気持ちを新年に当たり再認識するのであります。

財団法人水交会は公益法人化を目指し、より広い公益化の事業とより強い基盤に根差した組織に向け国の認可を受けるべく業務を展開中であります。本年は横須賀水交会も本部の公益法人化に向けた業務に関連し支部会則の改正と共に海上自衛隊に対する支援業務を始め事業の更なる拡充を図って参りたいと思います。

さて、昨年は戦後一貫して続いてきた政権の劇的な政権交代がなされました。小選挙区制が施行され民意の動向が極めて敏感に大きく反映されたものだといえます。

この政権交代は何だったのでありましょうか。民主党の「利」のみに走ったマニフェストに踊らされ、自由民主党までが立党精神を忘れプレミアム券に見られるような理念を忘れた「利」を優先させた政策で国民から見放されたのではないでしょうか。歴史を誹謗し「義」を忘れ「誇り」を忘れた国家は亡国の一途を辿ることを冷徹な歴史が教えているところであります。

新年に当たり自民党神奈川県連が本部への提言として「わが党は保守本流としての「国防、外交、教育」の三本柱を明確にした国家像を早急に国民に示し、・・・」と謳ったのは地元横須賀水交会会員として力強さを感じるところではないでしょうか。

経済は遠心力がなければならず政治は求心力がなければならないと言われていますが現在は政治の求心力はなく政治までが遠心力となってしまっており、この三本柱こそその求心力となるものであると確信するものであります。

三浦半島地区には多くの防衛団体が所在して居りますが①各防衛団体が同一の活動を実施する場合の業務の企画、立案　②各防衛団体が実施する諸業務の連絡調整を実施する事で昨年8月「三浦半島地区防衛団体連絡協議会」（略称：防連協）が発足し、ここに念願の価値観を共有する下記に示します主要防衛団体が同じ土俵に乗り事を進める事

発行　平成22年3月10日
編集　横須賀水交会事務局

横須賀水交会主要行事予定

本年7月までの主要行事予定は、次のとおりです。多くの会員の参加をお願いします。

1　練習艦隊入港歓迎行事
(1)期日　5月12日（水）
(2)場所　吉倉岸壁

2　幹事会
(1)期日　3月30日（火）
(2)場所　2術校大講堂
(3)会議後、懇親会（東芝クラブ）

3　22年度総会・講演・懇親会
(1)期日　6月4日（金）
(2)場所　よこすか平安閣

4　馬門山墓地墓前祭
(1)期日　5月15日（土）
(2)場所　市営馬門山墓地

5　海軍の碑記念行事
(1)期日　5月27日（木）
(2)場所　ヴェルニー公園

6　第20回ゴルフ大会
5月（計画中）

となりました。各団体の代表者数名による幹事会を適時に開催し意思疎通を図っております。当面、水交会代表が防連協代表幹事を務める事となりましたが今後この「防連協」の名でご連絡をさせて頂く事も有りますので宜しくお願い致します。

平素から智恵と汗でご奉仕されている常務幹事また、ご多忙中にも拘らず出席され評議頂いている幹事の皆様に感謝し、更に会員皆様の力強いご支援ご協力をお願い申し上げご挨拶と致します。

（注）防連協参加団体《隊友会横須賀支部、隊友会武山支部、隊友会三浦支部、三浦半島地区父兄会　横須賀曹友会、どんがめ会、横須賀海交会、横須賀水交会》

「司令官挨拶」

潜水艦隊司令官　永田　美喜夫

横須賀水交会の皆様には平素から格別のご支援、ご高配を賜り、心から御礼申し上げます。また、この度は会員の皆様にご挨拶する機会を頂き重ねて御礼申し上げます。

私は、昨年3月に潜水艦隊司令官を拝命致しましたが、ドンガメ達との5年ぶりの再会を喜んでおりますと同時に、大きな変革期を迎えようとしている潜水艦部隊の舵取りを任されて身の引き締まる思いがしているところであります。

先日、本多先輩からお聞きしたところ、潜水艦隊からの寄稿は初めてということでしたので、今回は潜水艦部隊の近況について紹介させて頂きたいと思います。

最初に、昨年春に就役しました新型潜水艦「そうりゅう」について紹介致しますが、この艦の最大の特徴は、なんと言ってもＡＩＰと呼ばれる発電装置を装備したことでしょう。従来の潜水艦は、海面に出したスノーケルマストから外気を取り入れながらディーゼルエンジンを回して充電しておりました。この作業は海面上に大きなマストを出しますので航空機等から発見される危険性が高いばかりでなく、ディーゼルエンジンの発する雑音を探知されてしまうという危険もはらんでおりました。一方、今回装備しましたＡＩＰ装置は艦内に貯蔵している液体酸素を使って発電致しますので、この危険を大幅に減らしてくれる夢のような装置です。とは言え、艦内に搭載できる液体酸素の量には限りがありますので、原子力潜水艦のように無限に走り回るという訳にはまいりませんが、敵威力圏下で行動する潜水艦艦長にとっては心強い懐刀になることと思います。「そうりゅう」には他にも非貫通潜望鏡やX舵といった新装備が多数採用されておりますが、これまで新型潜水艦が就役すると必ず聞こえておりました「あの装置はダメだ！」とか「この艦は使い物にならない！」といったベテランの声がまったく聞こえてまいりません。これも長年開発に携わってこられた先輩方や、完成度の高い艦に仕上げて頂いた官民技術者の皆様のお陰と感謝致しております。今後は、この潜水艦の能力を余すところなく引き出していくとともに、次のステップを見据えた潜水艦を目指して汗をかいていかなければと決意を新たにしているところです。

次に、部隊実習制度の見直しについて触れたいと思います。平成7年、学校教育で「ゆとり教育」が脚光を浴びていた時期ですが、海上自衛隊においても大規模な教育改革が行われ、併せて教育人年が大幅に削減されました。潜水艦部隊においても、それまで1年間かけていた部隊実習を半年間に短縮致しました。しかし、「知っていること」と「やれること」の差は如何ともし難く、技量の定着にまで至らない者が出るようになってしまいました。年月を重ねるうちに、これらの者が指導する立場になり、後輩が彼らをお手本として育つという悪循環に陥ってしまったのです。この悪循環から脱却すべく一昨年から実習期間を約１年に戻すとともに、崩れかけていた徒弟教育を補完するため、新たにシラバス制度を導入することに致しました。昨年5月に新制度で育った実習幹部の最終審査を行いましたが、満足できるレベルに仕上がっておりました。ただし、その陰には休

日返上で実技審査に当たった艦長や、「オラが実習幹部」を合言葉に夜中まで実習に付き合ってくれた乗員諸君の献身的な努力がありました。一度失ったものを取り戻すには創る時以上の努力が必要と言われますが、二度と同じ轍を踏まないためにも潜水艦部隊挙げてこの人創りのシステムを死守してまいりたいと思っております。

技術の進歩に伴って装備は良くなり艦の性能も向上しますが、最後の要はやはり「人」です。これは、かつて自動化や省人化を推進した者の反省でもありますが、新しい装備や教育制度を導入しようとする際には、出来上がった乗員で運用できるかだけではなく、後に続く後輩達に技を繋いでいけるかという観点からも検討を加える必要があると思います。さらに言えば、先輩から受け継いだ技術や伝統に少しでも付加価値を付けて後輩にバトンタッチするのが我々の責任であり、そのための努力を怠れば取り返しのつかない結果になることを肝に銘じて、これからの舵取り業務に精進してまいりたいと思います。

横須賀水交会の皆様には、今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げますとともに、横須賀水交会のますますのご発展と会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

「投稿」

青春の奇跡―特殊潜航艇「回天」特攻隊員の遺稿より―

熊本市在住　伊佐　二久氏

以下の遺稿は特殊潜航艇「回天」乗組み特攻隊員の遺稿ですが、私はこれを奇しくも１９６９年、米国パロアルトにおられた故本山啓正上人(仏教寺院住職、海軍兵学校出身、その後熊本県菊池市に在住)のお宅で拝見し書き写してきたものです。その日はたまたま釈迦誕生日で日系の信徒がたくさんおられましたが、中に僧衣を着たアメリカ人のお坊さんが数人いたのが印象的でした。

(註) 回天は昭和18年、黒木、仁科が考案、試作1号に黒木大尉自ら乗組み訓練中事故で海底に沈没、死を覚悟しながら冷静沈着に報告書及び意見書を記述しています。生死の境にありながら睡眠をとって、酸素消費を少なくするなど余裕綽々足るものがあります。

① 黒木博司(24歳、昭和19年殉職)

「昭和19年9月6日回天事故報告」

18:12樋口大尉操縦、黒木大尉同乗、第1号海底に突入せり。前後の状況、所見次の如し。

1．事前の状況: 徳山湾内にて17:40発射、進路蛇島向首、18:00頃180度取り舵、大沖島グレーンに向け帰路途中、深度略18m海底に突入せるを知り、直ちに停止す。突入時衝撃なし。

2．応急処置: (1)5分間隔に主空気の1分間排気、調圧を10kgとし気泡を大ならしむ。残圧60kg (2)電灯異常なし。操室圧力不明

3．事後の経過: 19:40スクリュー音を聞く、以下略。

4．所　見: (1)波長大なるとき、浅深度、高速潜航の可否は実験を要す。確たる成果を得るまで厳禁を可と思考す。(2)事故に備え用便器を要す。(3)実験よりして2人乗りは7時間を限度とす。(4)ハッチ口開を試みしも開かず。空気不足と思考せらるるにより只今(19:55)より睡眠す。(5)陛下の艇を沈め奉り申し訳なし。(6)恩師、先生はじめ先輩、諸友に生前のご指導深く謝し奉り候。(7)小官申し残す所存更になく、唯長官、総長、二部長等に意見書あり、聊か微衷お汲み取り下されたし。(8)必死、必殺にあらずんば・・(以下不明)(9)・・(不明)

天皇陛下万歳、大日本帝国、帝国海軍万歳

追伸: (1)絃外灯を設くべきこと(2)応急ブローを設くべきこと(以下略)

時世『男の子(おのこ)やも　わがことならず　朽ちぬとも　留めおかまし　大和魂』『国を思い　死ぬに死なれぬ　益荒男が　友しのびつつ　死してゆくらん』

自室紫袋内の士規七則を黒木家に伝う。家郷には戦時中言うことなし。意中諒とせられよ。父上、母上、妹、お達者に(以下壁書)。

22:00壁書す。天皇陛下万歳、帝国海軍万歳、大日本万歳

昭和19年9月6日　22:00　呼吸

苦しく思考やや不明瞭。手足ややしびれたり。04：00死を決す。心身爽快なり。

心より樋口大尉と万歳を三唱す。

『死せんとす　益良男子（ますらおのこ）のかなしみは　留め護らん魂の空しき』

所見万事は急務所見、ないしは急務請献にあり。同士の士願わくば一読、緊急の対策あらんことを。

昭和19年9月7日04：05絶筆：樋口大尉の最後従容として見事なり。我また彼と同じくせん。04：45君が代斉唱、神州の尊、神州の美、我今疑わず、莞爾としてゆく、万歳

② 上西徳英（18歳、昭和20年8月11日沖縄で戦死）

お父さん、お父さんのひげは痛かったです。お母さん、情けは人のためならず。忠範よ、最愛の弟よ、日本男子は御楯となれ、他に残すことなし。和ちゃん、海は私です、青い静かな海は常の私です、さかまく涛は怒れる私の顔。

③ 佐藤　章（26歳、昭和19年11月20日ウルシーで戦死）

妻へ、まりえ殿、かねて覚悟し念願していた「海行かば」の名誉の出発の日が来た。日本男子として皇国の運命を背負って立つのは当然のことではあるが、しかし之で僕も日本男子だぞと自覚の念を強うして非常に嬉しい。短い間ではあったが心からお世話になった。俺にとっては日本人の妻だった。小生どこにおろうとも君の身辺を守っている。正しい道を正しく直く生き抜いてくれ。子供も唯堂々と育て上げてくれ。いわゆる偉くすることもいらぬ、金持ちにする必要もない、日本の運命を背負って地下百尺の捨石になる日本男子を育て上げよ。小生も立派に死んでくる。十分体に気をつけて栄え行く日本の姿を、小生の姿を思いつつ、強く正しく直く生き抜いてくれ。　昭和18年9月21日　章

④ 本井文哉（19歳、昭和20年1月戦死）

我が残すもの：拝啓　私死すとも先祖代々の墓のほか決して他の墓（私だけの）を作らざるようお願い申し上げます。なお葬るべきもの一つなき故に、私の毛髪をここに入れておきます。

⑤ 和田　稔（23歳、昭和20年7月殉職）

私は今私の青春の真昼前を戦いの国に捧げる。私の望んだ花は遂に地上へ開くことがなかったとはいえ、私は根底からの叫喚によって、きっと一つのより透明な、より美しい大華を大空に咲きこぼすことが出来るだろう、その時私の棺の前に唱えられるものは私の青春の挽歌ではなくて、私の青春の賛歌であってほしい。あと1月、丁度学期試験の前のような気持ちである。死生観とか何とかとりたてて何も言う必要はない。私たちは幸福である。私にはN中尉のように大仰な言葉は吐けそうにない。彼の言々句々はすべて一途な愛国の熱に燃え上がっている。しかし私の冷厳な心はそれすらも静かな内省の深みに押し静めようとしている。勿論そのような内省などたしかにつまらぬ、そして不必要なものと言われるべきであろう。しかし一度考えることを知った私達には、それは不可避の重荷であることを感ずるのだし、またそれを担ってこそ私には私の一生の清算が出来ると思うのである。

『玉の緒を　つなぎとめ得て　今日の日を　醜（しこ）の御楯と　生きるうれしさ』

以上特殊潜航艇「回天」乗組員の遺稿をご紹介しました。若い方々の参考になれば幸いです。

（編集注）【編集後記】に投稿者　伊佐氏からの手紙を掲載しました。

「会員投稿」
このままで良いのか
何時までも日本の国防意識の欠如

幹事　吉富　明治

１９４５年の敗戦から早今年は、65年が経過した。涙と悲嘆にくれ、日本の前途を憂慮しながら海軍最少年兵の特年兵であった私達は復員し、途方に暮れていたが傘寿を超えた歳となった。敗戦ショックで復員後3年間は何をなすべきか全く方向性を失い青春を無意味で送ったことは残念の極みである。

１９５２年4月28日対日講和条

約・日米安全保障条約発効で日本は6年8ヶ月振りに独立を回復する。独立はしたが、アメリカの戦後占領政策は、日本憎しで徹底的に弱体国家にされ、涙を呑んだ想い出は、忘れる事が出来ないことである。戦争で負けると言うことがこれほど日本人が打ちのめされた歴史はない。日本人は有史以来外国軍隊に蹂躙されたことがないので、アメリカの占領政策に言われるままに、応じて国家尊重や日本人としての誇りさえ放棄してしまった。

その最たるものは、戦争放棄で軍隊を持たせない憲法を、押し付けられたことである。当時は占領軍の言うことは，聞かざるを得なかったこともあろうが、独立した後も憲法９条を金科玉条として、軍隊を持とうとしないことである。どうしてこの様な自立心のない腑抜けな国民になったのか。何時までもアメリカ占領政策による、日教組の反戦思想教育から脱皮して、明治維新前後の国際関係の歴史を学び、明治の先覚者の英知で日本が植民地にならず、そして日露戦争で白色人種に日本が勝ったことで、アジア植民地の人々に希望を与え、太平洋戦争ではアジア植民地全域の人々の念願であった独立を日本は多大な犠牲を払って成就させ、独立した国から神の国として崇められていることの歴史を知悉させ、太平洋戦争は八紘一宇の聖戦であったことを自覚させる要がある。世界中の独立国で何処に軍隊を持たない国家があるだろうか。

日本が独立した直後に、アメリカがパトロール・フリゲート艦等を貸与して海上防衛を強化する計画が、発表されその要員を公募することが新聞に掲載された。その時私は海軍が誕生すると信じて応募し，海曹の1期生として入隊した。その2年後保安庁が防衛庁にとなるも、海軍にならず、退職までは海軍になると信じていたが昭和54年になっても、国軍と呼称されることなく、戦争の出来ない自衛隊にして国民は安閑としている。これは国の安全を真剣に考慮することなく、軍事力を持てば戦争になると言う反勢力の宣伝を容易に信じ、軍隊にすることに反対する国民がいるからである。この人達は自分の国は自分で護るという愛国の基本姿勢が無いという事である。

戦後日米安全保障条約の成立過程も考えることなく、戦争被害が無かったことで、侵略の脅威を知らず、平和ボケの国民になっているからである。同じ敗戦国のドイツは戦後30数回憲法を改正して自国を護る軍隊を保持している。北朝鮮が日本国民を多く拉致出来たのは、日本には軍隊がなく決して攻めては来ないと言うことから、容易に非人道的な拉致出来たものであり、同胞の安全保護対策を怠った事から起因している。今の日本人はこのことは人ごと思っているのか国を挙げて奪取する気概もない。

昨年総選挙で自民党が惨敗し、民主党政権になったが、国民が選んだことであるが、自衛隊不要論を唱える社民党と連立を組んだ鳩山政権は、真剣に国を護る信念と施策が出来るのかと危惧するものある。言うまでもなく国の安全と外交は政治の基本姿勢であり、国の安全なくして経済も福祉もあり得ない。この様な新政権に安全・外交政策に不安を隠せず、沖縄普天間飛行場移設を国家間の契約でありながら履行を躊躇しパトナーとしての信頼を失う事に民主党議員誰も危惧せず、切歯扼腕するのは私のみではないと思う。この様な政権を希望した日本人がいるかと思うと，我々退職自衛官を含め自衛隊員が、これまで世間の荒波の中で営々と築き上げてきた信頼を一夜にして忘失する恐れがある。

１９９０年「日本の自衛隊員を戦場に送るな」という発想から「湾岸戦争」に於いて平和を金で買えると信じ、国民の税金から１３０億ドルの大金を送ったが、日本人の血を流す事を恐れ平和を金で買おうとした日本の行為を世界は笑い、大恥をかいたうえ、巨額の大金は有効に使用されず、どぶに流したようなものと揶揄されたことを忘れてはならない。

この世界から失笑された日本の恥を払拭してくれたのが、海上自衛隊の「湾岸の夜明け作戦」であったことを、思い出して貰いたい。

（平成３年イラク戦争終結後、政府はようやく今回は機雷除去に艦艇をペルシャ湾に派遣して世界一の技術で機雷除去を行い、日本の高度な技術能力が評価され、国際貢献して前回の金は出すが命は出せないと言う悪評を払拭する。）

隊員は灼熱と砂塵の嵐と戦って苦闘して成果を収めて帰国した隊員を、時の首相は送るときも帰国したときも顔も出していない。

当時この派遣も国会でようやく前回の失策もあり実現したが、世界の常識である「軍事力の必要性とその意義」を日本国民は理解していない。又新聞もテレビ等も国際貢献で栄誉な名声を博した部隊の成果を大々的に報道して国民を鼓舞しようとする意図もない。

日本がインド洋での国際テロとの戦いにかろうじて安全で効果的に参戦して世界から感謝され良い評価を得ていた燃料補給支援を、民主党の新政権は国家の国際信望忘失を考慮することなくマニフェストを盾にいとも簡単に給油支援を止め、国際社会から日本の国際貢献の姿勢を問われて、評価を落としてしまった。インド洋でのこのプレゼンスが無くなることによって生ずる国家的損失は、極めて大きいと言わなくてはならない。敗戦ショックから半世紀以上経過した今、何時までも自辱史観にまどわされることなく、胸を張り歴史を学び、大東亜戦争は日本が始めたのでなくアメリカの世界戦略の巧妙な手段で罠に嵌った日本の外交を研究して二度と前者の轍を踏むことなきよう国民の防衛意識を高める要がある。

私達を育んでくれた日本が国際社会で誇れる国になることを願い、どうすることが、日本に生まれて良かったと思う国にすることが出来るかについて現役隊員と共に考えたい。

防衛諸団体合同
新年賀詞交歓会の開催

横須賀地区の防衛諸団体共催による恒例の新年賀詞交歓会が、1月9日（土）の午後、平成町にある横須賀商工会議所において開催された。

この合同賀詞交歓会は、防衛関連10団体が近傍の自衛隊の主要幹部、先任伍長等を招待して新春の賀詞を交換するとともに、陸・海・空自衛隊を激励し、あわせて、諸団体・会員相互の親睦を図ることを目的に例年実施しているものである。

当日は晴天に恵まれ、来賓を含め約２９０名もの多数の参加を得て、盛大に行われた。式典は、国歌斉唱の後、共催の防衛関連10団体（横須賀防衛協会、横須賀水交会、隊友会横須賀支部、財団法人三笠保存会、海上自衛隊横須賀曹友会、横須賀自衛官募集相談員の会、桜友会、晨洋会、三浦半島地区自衛隊父兄会、横須賀海交会）会長等の紹介、共催団体を代表して小山満之助横須賀防衛協会会長の挨拶、来賓を代表して松岡横須賀地方総監及び吉田横須賀市長の祝辞、来賓の紹介、祝電披露、乾杯、懇談の順で進められた。

自衛隊代表の松岡総監からは、「昨年、劇的な政変を迎え、日米安全保障にも影響が見えるが、我々自衛隊は与えられた任務を整斉と行い、国民の負託に応える。」との力強い決意が述べられた。

吉田横須賀市長の祝辞では、「横須賀を防衛省・自衛隊及び米海軍と共栄する防衛拠点の都市として、全国に売っていく。特に、ＮＨＫドラマ『坂の上の雲』の舞台である戦艦三笠を目玉としたい。」と述べられた。

また、来賓の紹介においては、国会議員、県会議員、市会議員からそれぞれ短い挨拶を頂いたが、昨年との違いは民主党議員数が自民党議員を上回ったこと、また、大石参議院議員ほか民主党議員、小泉衆議院議員など自民党議員及び浅尾衆議院議員が、国会を念頭に、外交・安全保障に関連した売込み合戦を行い、例年と様変わりの来賓紹介となった。

鏡開きは、「菊水」「元帥」の四斗樽を用いて、五百旗頭防衛大学校長、杉本自衛艦隊司令官、レン在日米海軍司令官など8名により、「1、2、3」の掛け声で、力強く行われた。

五百旗頭校長の発声による乾杯の後、懇談は樽酒のお陰もあり、大いに盛り上がり、現役、会員等お互いの親睦を十分に図ることが出来た。最後は航空自衛隊第2高射隊長倉本2等空佐の乾杯で、惜しみつつ中締めとなった。（岩永幹事　記）

「いかづち」出港・見送り
給油支援のためインド洋へ

11月9日（月）、補給支援特措法に基づきインド洋方面における、各国海軍に対する給油支援活動を実施するため、護衛艦「いかづち」（艦長　梅崎　時彦2佐、乗組員約１９０名）は横須賀を出港した。第７護衛隊司令　酒井　良1佐が派遣部隊指揮官として乗艦し、補給艦「ましゅう」（定係港　舞鶴、同日出港）と洋上で合同し任務行動に赴く。両艦は、護衛艦「すずなみ」補給艦「おうみ」と、12月初め、現地で交代する予定である。

出港行事は、松岡横須賀地方総監執行のもと、楠田防衛大臣政務官訓示、杉本自衛艦隊司令官訓示、山下横須賀市議会議長あいさつに続き、派遣部隊指揮官の頼もしいあいさつが行われた。

石破衆議院議員、小泉衆議院議員、佐藤参議院議員などのほか水交会など防衛関連団体等の長などが参列され、盛大な出港行事であった。

軍艦行進曲の演奏をバックに、乗組員は任務に赴く心を胸に整斉と乗艦し、極めてスマートに出港した。

帽振れにあわせ、自衛艦旗の小旗、水交会旗、各会の激励幕等が振られ、超長一声の汽笛が響くさわやかな出港であった。

「いかづち」にとって任務行動は、給油活動開始後、4回目であり、前回の帰国後1年2ヵ月振りである。

出港前、士官室において、水交会からの激励品を隊司令立会いのもと、艦長へ贈呈した。

国際テロの根絶のため、厳しい環境下、長期間に渡り、インド洋にプレゼンスすることは、日本が国の意思を明確に示す、いわゆるショーザフラッグである。海上交通の安全を守り、関係国の信頼を高め、国益にかなうものであることを強く認識しなくてはなりません。国内の事情により昨年、一時中断があったが、２００１年11月以降、8年にわたり連綿とあの海域にプレゼンスしたのは、アメリカのほか日本しかないのです。それだけの実績があり、列国から頼りにされたにもかかわらず、インド洋の給油活動は評価が低いという防衛大臣の言葉がありましたが如何なものかと思います。

司令、艦長はじめ乗組員の皆様、誠にご苦労様です。武運長久と任務完遂を祈ります。（本多副会長　記）

「はるさめ」帰国、出迎え
海賊対処の部隊交替

11月29日、ソマリア沖アデン湾において海賊対処の護衛活動に従事していた護衛艦「はるさめ」（艦長　橋向亮介2佐、乗組員　約１９０名）が任務を終えて、横須賀に入港、帰国した。第2護衛隊司令　在原政夫1佐指揮下に「あまぎり」とともに7月6日出港し、7月下旬から、現地で護衛活動を行い、11月2日に終了し、この度帰国したものである。

松岡横須賀地方総監執行による帰国行事は、小泉衆議院議員、吉田横須賀市長、海上保安庁警備救難部長、商船三井、日本郵船、川崎汽船などの関係者、杉本自衛艦隊司令官など各部隊指揮官、隊員、家族など多数の出迎えがあり、横須賀水交会は長崎会長ほか多くの会員が参加し、自衛艦旗小旗、水交会旗を掲げて出迎えた。

司令帰国あいさつ、自衛艦隊司令

官訓示、来賓を代表して横須賀市長あいさつ、来賓紹介などの行事は整斉と進められ、「はるさめ」乗員の逞しく、凛々しい様子は、任務を完遂した誇りが感じられ大変頼もしいものであった。

公表された資料によると、派遣海賊対処行動水上部隊(第２次水上部隊　護衛艦「はるさめ」及び「あまぎり」)の活動実績は次のとおりである。護衛回数３４回　護衛隻数２４８隻(１回平均７．３隻)で　内訳日本船籍２隻、我が国の運航事業者が運航する外国籍船８８隻(そのうち、日本人が乗船する外国籍船　１０隻)　その他の外国籍船１５８隻以上のうち、海上警備行動では護衛対象にならなかったと考えられる船舶は１５６隻と公表されている。

現地ではジプチに寄港しているが、水はよくなく、気候は暑く厳しく、治安にも十分な注意が必要とされている。長期間にわたり、緊張を強いられ、行動後の休養もままならないものと推察します。

海賊対処法による、最初の派遣であり、実際の対処場面も多々あったことがうかがえます。

国際的な責務を果たし、国益を守った乗員各位に対して、心からの感謝と敬意を払います。お疲れ様でした。ありがとうございます。

なお、防衛省の報道資料によると、11月23日、国際海事機関(本部　ロンドン)による本年度の勇敢賞は、ソマリア沖において海賊対処に従事した、我が国を含む関係各国の部隊が受賞した。我が国から、海賊対処部隊を代表して、第１次派遣航空部隊の司令を務めた福島１佐が授与式に出席した。(本多副会長　記)

「おおなみ」第４次海賊対処
水上部隊としてソマリア沖へ

護衛艦「おおなみ」(横須賀　艦長　大久保幸彦２佐　乗組員約２００人)は、海賊対処法に基づき、ソマリア沖アデン湾へ向け１月29日(金)、横須賀を出港した。

第６護衛隊司令　南幸宣１佐を指揮官に護衛艦「さわぎり」(佐世保)とともに現地へ向かい２月下旬には「たかなみ」及び「はまぎり」と交代し、任務に就く予定である。

松岡横須賀地方総監執行の出港行事は、楠田防衛大臣政務官訓示、杉本自衛艦隊司令官訓示、第６護衛隊司令挨拶、花束贈呈など盛大に行われた。佐藤参議院議員、金子参議院議員、吉田横須賀市長、県議、市議、日本船主協会、海上保安庁、各級指揮官、隊員、家族、水交会など防衛団体、地元関係者など多数の参加者があり、国旗、自衛艦旗、激励の幟などが掲げられ心のこもった見送りが行われた。

乗組員は、海の男らしさ溢れ、任務に赴く決意が漲り、頼もしさが感じられた。日ごろの訓練の成果を遺憾なく発揮してもらいたい。離岸し、帽振れに合わせた、汽笛(超長一声)が印象的であった。

行事に先立ち、士官室において、水交会からの激励品を艦長へ贈呈した。

なお、海賊対処航空部隊第３次隊(Ｐ－３Ｃ、２機)は２月３日、八戸を出発、第２次隊と交代する予定である。

報道によると、昨年３月から、この１月24日で１００回の護衛活動を実施し、累計５６２隻を護衛したと伝えられている。１００回目の護衛の終了に際し、日本船主協会から防衛省へ次の感謝のメッセージが寄せられた。

「今般、わが国護衛部隊によるアデン湾における１００回目の護衛が行われましたが、この間、護衛船団に対する海賊からの攻撃は一切発生することなく、全ての船舶が無事に通航することができました。アデン湾における海賊対処行動は、これまで第１次から第３次にわたって護衛部隊を派遣して実施されていますが、これは国民の皆様のご理解はもちろんのこと、国会関係、政府関係の方々のご理解・ご支援の賜

物と改めて深謝申し上げます。この海域を通航する商船に取りましては、海上自衛隊の護衛艦および哨戒機による活動は何にも増して心強いところです。また、現地の酷暑と緊張の中、護衛活動にあたられている海上自衛官・海上保安官の皆様のご苦労を想い感謝の念に耐えません。これからも健康に留意され、無事に職務を全うされますよう心よりお祈り申し上げます。

日本船主協会会長　宮原耕治」

海上交通路の安全確保のため、国益のため、はるか遠いアデン湾において、長期間の任務行動を実施する部隊に対し深甚の敬意と感謝を捧げたい。

（本多副会長　記）

「いかづち」補給支援終了し帰国

護衛艦「いかづち」はインド洋における、補給支援特措法の期限1月15日をもって活動を終了し、2月6日帰国した。第7護衛隊司令酒井良1佐を指揮官に補給艦「ましゅう」（舞鶴）とともに東京晴海埠頭に当日午前入港した。

鳩山総理大臣から特別賞状が授与され、北澤防衛大臣訓示など盛大な帰国行事が行われた。

その後「いかづち」は横須賀へ回航、夕刻入港した。休日にもかかわらず、指揮官等のほか家族、横須賀水交会など防衛諸団体会員等多数が出迎え、自衛艦旗小旗、水交会旗などを掲げ、任務達成を祝い、乗組員の労をねぎらった。

インド洋での給油活動は２００１年、アフガニスタンのテロ対策に関する国際貢献として始まり約８年間、米国など12カ国に、累計約51万キロリッターを補給し関係各国からの信頼を得ていた。

長期間、気候風土の全く違う厳しい環境において任務行動に従事され、誠にお疲れ様でした。ありがとうございました。短い時間かと思いますが、ゆっくり休養され英気を養ってください。

国益を守り、国際的な責務を果たした艦長はじめ乗組員各位に対し深甚の感謝を捧げます。

（本多副会長　記）

「いかづち艦長からのお礼」

（中央：いかづち艦長　梅崎２佐）

拝啓

梅花の候、ますますご健勝のことお喜び申し上げます。

平素は、格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

おかげさまをもちまして、インド洋における約八年間の補給活動を無事故で締めくくり、二月六日無事帰国することができました。これは、皆様の海上自衛隊の活動に対する深いご理解と暖かなご声援や励ましがあってこそ成し得たものであり、改めて深く感謝申し上げます。

今次の派遣は、関連法案の期限切れに伴い約三ヶ月の短期間ではありましたが、諸先輩方が積み重ねてこられた八年間のご苦労と海上自衛隊に対する信頼を決して無にするようなことはしてはならないという強い決意の下、乗員が一丸となり緊張感を持って活動した結果、無事故で活動を納めることができました。ほっと安堵しております。

インド洋での補給支援活動はこの度終了することになりましたが、国際情勢の趨勢から、同様の海外派遣活動は今後も増えていくことが予想されます。我々は、向時如何なる任務が付与されようと、国民の皆様の付託に応えられるよう日々精進していく所存です。

今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

先ずは、略儀ながら、御礼申し上

げます。

平成二十二年二月　敬具

横須賀水交会会長
長崎　嘉徳　様

いかづち艦長
梅崎　時彦

初代しらせ最後の出港

平成22年2月10日（水）10時54分、初代「しらせ」は、ウェザーニュース 社に引き取られ、横須賀Ｙ－４岸壁を曳船3隻に引かれ、第２の人生に出帆しました。

多くの海上自衛官はじめ、ウェザーニュース社関係者、水交会及び父兄会等の方々に見送られ、横須賀音楽隊演奏の中、しずしずと出港しました。

昭和58年以来、一昨年の除籍に至るまで25年に亘る南極観測支援業務に従事し、艦首の色あせた水切りがその雄姿を表しているようでした。「しらせ」は、25年間に１１，６３５名の人員と毎年１，０００トンを越える物資の輸送業務に従事した他、海洋観測においても、オゾンホールの発見等、数々の発見をしております。

見送りに来た人々の中ではこのような「しらせ」の偉業の話に花を咲かせたりしておりました。

見送りの式典は、10時45分から始まり、横須賀地方総監部幕僚長畑田将補、文部科学省研究開発局海洋地球課 丸山氏の惜別の辞の後、ウェザーニュース社代表取締役会長　石橋氏が「今後、環境問題のシンボルとして、この「しらせ」を船出させたい。」と言葉をかけられたのが、印象的でありました。

ウェザーニュース社の関係者によりますと、「しらせ」は、今後、横浜の三菱造船所ドックに向かい、塗装等、お色直しを実施した後、船橋の桟橋に係留され、環境問題の各種講演会あるいは情報発信の場を提供することになるほか、ウェザーニュース社業務の一部も「しらせ」艦内で行う計画ということでありました。又、船橋の桟橋を拠点として、横浜港や晴海埠頭等、曳船により移動し、活動することも考えているとのことでした。

「しらせ」に詳しい白瀬南極探検隊をしのぶ会 湯川副会長によりますと、この「しらせ」のスクリューは、予備も含め８機あるそうですが、その６機は国内の北海道稚内、秋田県、愛知県及び都内数箇所に引き取られたとの事ですが、今後、「しらせ」の第二の人生における活躍が期待されます。

（泉幹事　記）

第19回横須賀水交会主催
ゴルフコンペを実施

去る11月16日(月)、第19回横須賀水交会主催ゴルフコンペを千葉房総半島のザ・鹿野山カントリークラブにて開催しました。

当日は風もなく好天に恵まれ、絶好のコンディションのもと、長崎会長以下46名のゴルフ愛好者が腕を競っていました。開かれた横須賀水交会ゴルフコンペの方針により広く参加者を募りましたところ、今回も陸自出身者と民間からの参加者が２名ありました。

競技はダブルペリア方式で実施しましたが、優勝を木谷正樹氏がグロス92、ハンディキャップ20、ネット72で勝ち取り、２位には中尾誠三氏、３位幹事の持永昇三(同率

３位澤田欣也氏)という成績でした。

ダブルペリア方式のために入賞者がうまい人に固まるという傾向にあったため、過去３回の入賞者（1、2、3位）には減点のハンディを与えるという変則的なルールを採用し、楽しんでプレイし、賞品ももらえるという形にしております。

ベストグロス賞には、シニアの部（65歳以上）近藤義美氏がグロス79で，ジュニアの部(65歳未満)懸芳光氏がグロス80で受賞しました。

ここ数回女性の参加者がないため、コンペに活気及び潤いがないという所見をいただいており、会員のご夫人、家族のみならず友人にまで声をかけ、次回には多数の女性の参加を得たいとと考えておりますのでよろしくご協力のほどお願いします。

（持永幹事　記）

『カード同好会のご案内』

横須賀水交会カード同好会は、1月20日会員16名が参加し、本年の活動を開始しました。まずお昼に新年会を開き、ささやかに屠蘇がわりのビールで乾杯し、昼食をとった後、ゲームに入りました。結果は、優勝者とブービーメーカーの点数が百点を超えるような波乱の幕開けでした。

本年も楽しく、カード同好会を実施したいと思います。

皆様のご参加をお待ちしています。

「カードをしながらお喋りと
お茶の楽しいひとときを
過しませんか。」

実施日：毎月第1土曜日及び第3水曜日午後1時～5時
場　所：横須賀総合福祉会館（汐入）
会　費：千円（お茶代、会場借料
賞品代など）
連絡先：満尾　哲郎
℡０４６－８４３－０５０６
岩岡　光
℡０４５－７８８－５３１３

『卓球部のご案内』

「卓球で一緒に汗を流してみませんか」

横須賀水交会卓球部は、現在**横須賀市北体育館**（横須賀市夏島町２番地）で**毎月第1及び第3土曜日9時から12時まで**、毎回約20名の会員が参加し和気あいあいと汗を流しています。

会員の中には、80を超えて元気旺盛な鈴木豊氏や60歳代から70歳代の華麗なプレイを楽しむ会員、更には家庭婦人等の有志会員が多数参加されて盛況な活動となっております。

卓球の運動は、身体的には過重とは思われませんが瞬発力を育て若さを維持する原動力となっていると確信しています。

なお、毎回　初級者を対象にユニークな練習を実施し、成果を挙げています。

「是非　水交会の皆様の参加を
お待ちしています。」

連絡先：佐々木　清一郎
℡０４６８－８８－６７１６

「三笠保存会便り」
特別展「秋山真之と正岡子規」

ＮＨＫスペシャルドラマ「坂の上の雲」の放映にあわせ、「記念艦三笠」では5月9日までの予定で、「秋山真之と正岡子規」特別展を開催しております。

本特別展は、明治という激動・大変革の時代を懸命に生き、偉大な功績を残した秋山真之と正岡子規の生涯について解説し、掛軸、写真など秘蔵の資料を展示しており、観覧

を通じて我が国発展の基礎を築いた先達の誇りと気概に触れ、さまざまな事柄について学んでいただくようねがっています。

なお、本特別展は、(財)三笠保存会と三笠ルネッサンス（横須賀市、横須賀商工会議所、京浜急行、三笠保存会）が「坂の上の雲」のまち、松山の協力を得て開催の運びとなったものです。

（三笠保存会事務局）

「本年度就役艦艇」

（艦艇名、就役日、建造所）

1潜水艦「うんりゅう」
3月25日、川崎造船神戸

2掃海艇「たかしま」
2月26日、ユニバーサル京浜

3海洋観測艦「しょうなん」（新型）
3月17日　三井造船玉野

訃報

昨年11月以降、次の会員が逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

（敬称略）

辰田　日出夫(横鎮S5)　11月13日
小野　勉　(幹予49)　1月26日
梶山　仁志(幹候8)　1月27日

（本多副会長　記）

新(編)入会員（10月～1月）

次の方々が横須賀水交会に新たに入会（編入）されました。

（敬称略）

宮崎　良子(幹候28)　小野山　典文(幹候27)　永井　元治(有志)　平田峰男(部内13)　山本　克彦(幹候27)　松原　研二(幹候28)　宮崎　道夫(幹候28)　高田　博幸(幹候25)　宇都隆史(有志)　川口　卓男(補士02)　廣田　政治(幹候29)　小西　寛昭(幹候28)　江森　啓治(有志)

（河村幹事　記）

【編集後記】

今回投稿を頂いた2名の方は、陸軍と海軍の違いはあるが、ともに先の戦争を経験された大先輩であり、その考え方に共通するものがある。それは、国に対する強い思いである。愛国心に裏打ちされた言葉には人に訴える力を感じる。

最後に、特攻隊員の遺稿を送付いただき、命の尊さ、国を守ることの意義など考える機会を頂いた伊佐氏に感謝申し上げとともに、同封の手紙を紹介する。

（岩永幹事　記）

横須賀水交会　会長様
ほか御一同様

伊佐　二久

拝啓　突然お手紙を差し上げる段ご容赦ください。私こと陸軍士官学校55期（1922年生）で戦時中北千島幌莚島の守備に当たり、海軍の方々とも仲良くやっておりました。特に私の部隊(旭川第7師団)で編成したアッツ島占領部隊がキスカ島に移った後、無事撤収できたのは海軍部隊のお陰と今も感謝しております。

この頃の若い人は昔アメリカと戦争したことさえ知らない人もいるようですが、戦争体験を持つ人も少なくなりました。昔の青年がどんな気持ちを持っていたかを伝えていきたいと存じおります。

以下はアメリカで住職をされていた本山啓正上人から見せていただいたものです。水交会の方は詳細ご存知かと思いましたが、お役に立つかもしれないと思いお送り申し上げます。

黒木大尉は海軍兵学校で私が親しくお付き合いいただいた故井昭成氏、故磧本力氏の先輩にあたる由でこれも何かの縁と存じます。

先日熊本護国神社で戦没者及び自衛隊殉職者の慰霊祭がありましたが、旧軍人、ご遺族のほか自衛隊の方々（海上連絡官、航空連絡官を含む）も多数参列しておられました。

陸軍の偕行会にも自衛隊OBの方が多数入会しておられます。旧軍人はいずれ消滅しますので後を引き継いでいただければ有難いと存じおります。水交会も海上自衛隊OBの桜美会、海友会と合同されたように承っております。

以上特攻隊員の遺稿をお送りしました。若い方にもご紹介いただければ有難く存じます。

末筆ながら気候不順の折から皆様のご健康をお祈り申し上げます。